

「武士の時代 中世庄内のつわものたち」

平成29年9月9日～11月18日

酒田市立資料館

武士の登場以前

平安期、庄内地方は大和朝廷が建国した「出羽国」※の一部であった。出羽国の政庁としてつくられた「出羽柵（城輪柵）」は、いわば庄内に最も早くつくられた“城”であるが、当時まだ武士は台頭しておらず、貴族中心の世の中であった。

出羽柵では国の政治を執り行ったほか、朝廷と敵対していた蝦夷（東北に住んだ人々）に対抗するための準備が進められ、軍事拠点としても利用されていた。同時期に庄内には遊佐などの「荘園」（皇室・貴族らの私有地）がつくられ、税が納められていた。出羽柵には朝廷から役人が派遣されたが、遠く離れた土地への転勤は面倒なことであった。次第に出羽柵は力を失い荒廃してゆくが、役人たちの周囲で徐々に力をつけた地方の豪族たちは、のちに“武将”となって庄内の覇権争いに参戦する。

※出羽は“いでは”とも読む

武士中心の武家社会へ

荘園領主の中には、口出しする役人らの侵入を認めない「不入」の特権を得るところもあった。この結果、荘園は国から離れてゆき、その土地と人々は独自に支配されるようになった。貴族たちに反発する反乱も度々発生し、領主や部下たちは武装し、後に“武士”と呼ばれるようになる。武士はもともと朝廷や貴族に仕える「武官」を指す言葉で、紛争の解決・鎮圧を担当していた。地方の武士たちは私領を守るために貴族に従い、または土地の役人となることで成長していった。貴族の血を引く源氏・平氏は特に力をつけ、巨大な武士団を組織する。これはのちの武家政権成立の柱となった。中央では源氏・平氏が力をふるったが、北日本（陸奥・出羽）では、「安倍氏」が力を持っていた。しかし、安倍氏は源頼義・義家親子との戦い（前九年の役）により滅亡、同じく豪族である清原氏の内乱（後三年の役）ののち、「奥州藤原氏」が北日本の支配者となり、平泉を中心に一時代を築いた。

この時代は実力がすべてであり、「御恩と奉公」で強く結ばれていた主人と従者の関係も、主人の力が弱まれば主従関係は切れ、裏切りもあり得たのである。



新田目城跡

城輪柵にほど近い位置にあり、川北地域の有力者である留守氏が住んだ。留守氏は、後三年の役のあと、国府に“留守職”として残留した人物を祖先に持つ。城は四方を堀に囲まれ、高さ4.5mの土塁を有し、現在は県指定史跡となっている。

荘園とは？

荘園とは、貴族・大寺院・地方豪族などが、農民を動員して開墾した、政府公認の「私有地」である。荘園は政府に租税を納める必要があったが、一部の荘園はそれを無視するようになる。税が減れば政府の力が落ちてしまうため、多くの荘園は整理され衰退した。しかし、有力貴族・大寺院らの荘園は、政府に租税を免除してもらい、継続した。また、地方政治を“国司”（派遣された役人）が担うようになると、国司の独断で税の免除を認められる荘園もあった。

荘園の所有者の中には、中央の権力者に荘園を寄進して領主とし、自らは「荘官（地頭）」となって管理を担当し、土地の保護・支配を強める者もいた。その土地が身分の高い貴族や皇室に更に寄進されると、荘官の支配力も上がった。このような荘園は「寄進系荘園」と呼ばれる。中でも特に寄進が集まったのが、有名な奥州藤原氏である。

酒田市指定有形文化財 大般若経

（嘉暦年間～（1326～） 亀ヶ崎八幡神社寄託）

亀ヶ崎八幡神社は江戸期まで亀ヶ崎城内にあり、現在は酒田東高等学校そばに祀られている。八幡神は外部の敵から守ってくれる守護神として、武士たちに厚く信仰された。この大般若経は約690年前と非常に古い時代の古文書で、藤原隆明という人物が書写し、奉納したものと考えられている。嘉暦年ごろの東禅寺城（のちの亀ヶ崎城）の様子は不明だが、中央では後醍醐天皇らが打倒鎌倉幕府に向けてさかんに蜂起していた頃である。混乱期の中で筆写されたこの大般若経には、武家社会のなかで生きた人々の、安泰を願う思いが込められている。



南北朝期の動乱 生石延命寺の石碑は物語る…

生石にある延命寺の板碑は、南北朝期の庄内を伝える重要なものである。文永11年（1274）、弘安4年（1281）の「元寇」では日本が勝利したが、恩賞の不払い・農地の荒廃などで幕府は弱体化し、後醍醐天皇の倒幕運動によって鎌倉幕府は幕を閉じる。その後、新政に不満を持つ人々により、わずか3年ほどで京都の朝廷から追いやられた後醍醐天皇は吉野で「南朝」を、天皇を追いやった足利尊氏らは京都で「北朝」を立て、約60年の間対立したのである。

生石延命寺の板碑はこの頃のものである。年号に注目すると、若干の差だが、南北朝前期に作られた板碑は南朝年号が多く、後期は北朝年号が多い。これは、当時の酒田周辺の南北勢力を表していると考えられている。出羽国では、はじめ南朝勢力が強かったが、康永2年※北朝年号（1343）には北朝が優勢になる。この時、北朝側には武藤氏（大宝寺氏）、余目安保氏がついており、最上川南側には北朝勢力、北側には南朝勢力が及んでいたと考えられている。

板碑は生者・死者の供養のために建てられ、延命寺で最も古いものは鎌倉時代末期の正和3年（1314）のものである。中央から遠く離れた庄内も、貴族・武士たちの争いの舞台になっていたのである。

(鶴岡)に住んだことから「大宝寺氏」「大泉氏」とも呼ばれる。武藤淳氏(～永正9年/1512)は一族の中でも安定した地位を築き、幕府との交流も密に行っていた。寛正3年(1462)に「出羽守」に任命され、翌年には将軍・足利義政へ金1万両・馬10頭を献上し、多くの大名の賞賛を浴びている。淳氏の代以降、15世紀から16世紀中ごろは、庄内の諸将が争いを繰り返しており、中でも武藤氏と砂越氏は何度も衝突した。

砂越氏はもともと武藤氏の一族だが、めきめきと力をつけ、武藤氏と肩を並べる程の土豪に成長した。砂越氏は文明10年(1478)に幕府から「信濃守」を受領しており、宗家・武藤氏に匹敵する実力をつけていたことがわかる。当時、庄内全体を治める“領主”と呼べる土豪は存在しないが、武藤氏は最上川より南、砂越氏は最上川より北をそれぞれ支配し、周辺の小規模土豪らは保身のため、それらの傘下に入った。

庄内には次第に上杉氏と最上氏が勢力を伸ばしてくるが、それ以前の庄内では、武藤氏と砂越氏が周囲の武将を巻き込んで火花を散らしていたのであった。

色々威胴丸(亀ヶ崎八幡神社寄託)

亀ヶ崎八幡宮に奉納された甲冑の残欠。伝承では、建久2年(1191)に東禅寺城主となった武藤景頼が、源平合戦の際に着用したものといい、息子・武藤助平が奉納したとされる。こうした伝承があり、東禅寺城・亀ヶ崎城の歴代城主らは、毎年祈禱を行っていたという。※武藤氏の系譜は内容の違うものが複数存在し、武藤景頼・助平については詳細不明である。



武藤氏・砂越氏の衝突

◆永正9年～10年(1512～1513) 東禅寺合戦

永正9年(1512)、砂越氏雄と武藤澄氏の衝突が起きる。『出羽国大泉庄三権現起』には「大宝寺、砂越一乱、東禅寺合戦、大宝寺主従千餘人討死」とある。詳細は不明だが、東禅寺城に攻め込んだ砂越氏は城を落とし、武藤氏の軍を破ったのである。そして翌年、砂越氏雄は川南の武藤氏領地に攻め込む。しかし、前年の勢いに反して砂越氏は敗北。氏雄と息子・万歳丸は討ち取られたという。この争乱のあと、砂越氏雄の子・氏維が家を継いで砂越城を守った。その後十数年の間は和平の状態が続く。

◆天文元年～同6年(1532～1537) 砂越氏の大乱

砂越氏を継いだ氏維は、庄内の覇権を握るため、再度川南へと攻め込む。藤島城の土佐林氏(武藤氏配下)を落とし、大宝寺城下へと攻め込んでいった。砂越氏が力つけた背景には、越後などの他国に頼らず、地元の土豪らと結束を強めたことがあり、川南の一部有力者らが砂越氏に味方したという。『庄内年代記』には天文元年(1532)から「弓矢起」、同6年(1537)に「弓矢収」とあり、戦乱が6年間続いたことを示す。この争乱によって、大宝寺城下は焦土と化し、武藤氏は尾浦城(大山)へと居住を移した。また、砂越氏と武藤氏の間に挟まれた余目城主の安保氏は討ち取られ、家系は衰退したという。

6年続いた戦闘は、武藤氏と縁のある越後・上條定憲が仲介に入り停戦となる。30年ほど経過した永禄年間（1558～1569）には和平を結び、ようやく関係は落ち着いた。



砂越城跡

平田地区の中心地にあり、一部土塁の遺構と、復元された櫓・跳ね橋がある。ここを拠点とした砂越氏は、武藤氏と同程度の勢力を持ち、庄内の覇権をめぐって争った。廃城となってからは諏訪神社を本丸跡に置き、ほかは農地として利用され、現在は城址公園として整備されている。



尾浦城跡（鶴岡市大山公園）

大宝寺城と同様、武藤氏が拠点を置いた山城。現在も写真のような堀切（敵の侵入を防ぐための人工溝）などの遺構が残り、山頂からは大山の街並みが見渡せる。

武藤義氏の死

天正元年（1573）ごろから、武藤義氏が急速に勢力を伸ばしてくる。義氏は庄内川南をおもな勢力下におき、来次氏、留守氏ら有力者たちも武藤氏に従っていた。義氏が力をつけた理由には、上杉氏の勢力をバックに付けたことも大きい。武藤義氏は家老・前森蔵人を大宝寺城（鶴岡）に置き、自身は尾浦城（大山）に居住した。天正6年（1578）に上杉謙信が死去すると、最上義光が庄内に手を伸ばしてきた。義光は現在の山形市付近を治める地方大名であったが、親族を含む周辺の大名を次々に下し、領土を広げていたのである。

最上義光は前森蔵人をはじめ、庄内の武将たちに離反を促した。この誘いはうまくいき、天正11年（1583）に前森が離反。義氏のいる尾浦城を急襲したのである。『来迎寺年代記』には、「義氏繁昌、土民陳勞、前森謀反、庄中一統、大浦一城四方より発火、急に焼却、則義氏切腹」とある。義氏は裏山に逃げ、33歳で自害した。この離反の理由は不明だが、前森は最上地方出身であるという。前森はこののち「東禅寺筑前守」を名乗り、東禅寺城に住んだ。

義氏の死後、武藤一族の代表となったのは弟の義興であった。武藤義興は上杉氏と交流を持っており、上杉謙信は生前、越後村上城主・本庄繁長に「武藤氏になにかあった際は一任する」という旨を伝えている。子がいなかった義興は、本庄繁長の息子・千勝丸を養子に迎えていた。

東禅寺筑前守と武藤義興の対立は、最上 v s 上杉の構図でもあった。天正14年（1586）には再度東禅寺筑前守が義興を襲って失敗している。義光のおい・伊達政宗は荒れる庄内を不安視し、どうか和睦させようとしたが、失敗に終わっている。



於当朝日山八幡
大菩薩奉勸請
之間別当職之儀
依申付神領少々
令寄附者也仍
如件
天正四年丙子
九月拾日義氏
善勝房

酒田市指定有形文化財 武藤義氏寄進状 天正4年(1576) (矢流川八幡神社寄託)

当時勢力をふるった武藤義氏が、生石矢流川に八幡神社を建設し、延命寺の善勝房に別当職(責任者)を申し付けた際の文書。諸説あるが、この年を矢流川八幡神社の草創年としている。

『奥羽永慶軍記』に書かれた武藤義氏の最期

『奥羽永慶軍記』(元禄11年成立/1698)は東北地方の争乱を書いた軍記物であり、武藤義氏の最期を書いた記述がある。なお、著者である戸部正直の創作を一部含む点に留意してほしい。

…義氏は緋織の鎧を付け、芦毛(灰色)の馬に乗り、門前に出ると、敵の旗をみて「奴らは東禅寺の一味に違いない。者どもは続け!」と言い、前線へ駆け出そうとした。しかし、近習(主君の側に仕える家来)田尻三四郎が馬を引き留め「敵は大勢でやってきて、城の本丸まで攻め入ってきています。味方の数は少なく、そして寝返るでしょう。勝利無い合戦に、大将自らが出て雑兵の手にかかって討たれるよりは、城内で御自害してください。その間は敵を食い止めます。」と言った。

義氏はこれを聞き、「私が死ねば武藤家の血は絶えるだろう。いかにして命を全うし、願いを叶えようと思うなら、一方を打ち破り、浜辺に出て、船で越前に渡り、一族である敦賀の助十郎、もしくは若狭の武藤上野介に頼んで、軍を廻してもらおう。」と言った。三四郎はこれを聞いたが、「どちらへ逃げても敵は大軍で道を塞いでおり、その申し出は実現できないでしょう。途中で賊の手にかかって討たれるならば、いさぎよく御自害なさるべきです。」と義氏を諫めたのである。

義氏は力も無く、天正12年3月6日、33歳で腹を切り自害した。日ごろの悪政の為である。田尻は義氏の首を落とし、大山城に火をつけ、そのなかで自害した。残った100騎あまりの兵も、大軍に駆け込み長い間戦ったが、大勢の軍に取り囲まれ、最後には11騎が大手門の中に退いた。人も馬も傷つき、もはやこれまでと燃える城の中へ飛び込み、消えたのであった。

十五里ヶ原の戦い

天正15年(1587)10月、前森蔵人改め東禅寺筑前守は、最上義光の軍と共に、武藤義興がいる尾浦城を包囲した。尾浦城は落城し、義興は山形・谷地に送られ、数年後に没した。戦闘中に敗死したという異説もある。武藤義興の死により、400年の歴史を持つ武藤氏の血筋は絶えた。当

時16歳の千勝丸（義興の養子であり、本庄繁長の実子）はこの争いから脱出し、越後村上城へと逃げ延びた。主のなくなった尾浦城には、最上家家臣の中山玄蕃が置かれた。

天正16年（1588）8月、報復の機会をうかがっていた本庄繁長は、上杉景勝からの援護もあり、



大軍で庄内に攻め入った。「十五里ヶ原の戦い」（千安合戦）と呼ばれる合戦である。東禅寺筑前守ら最上勢は、千安川を挟んで本庄勢を迎え撃ったが、大敗。庄内は本庄氏、つまり上杉氏の領地となったのである。

（写真：十五里ヶ原古戦場／鶴岡）



東禅寺右馬頭の墓

東禅寺兄弟の弟、右馬頭の墓は十五里ヶ原古戦場にひっそりと建つ。そばにある塚は、討死した兵の首塚であるという。

義光は10月の書状に「油断してとりみだし、結局東禅寺筑前守らを討死させてしまった。なんともいえないことだ。」と書いている。上杉景勝は、本庄繁長と千勝丸の勝利を祝って虎の皮1枚を贈り、義光と敵対していた伊達政宗も勝利を喜んだ。最上氏側であった朝日山城主・池田讃岐守、観音寺城主・来次氏秀も降伏し、上杉氏に従った。一時期武藤氏と覇権争いをした砂越氏は、この戦乱で青沢へ逃れ、縁があった秋田・安東氏のもとへ身を寄せ、その後は福島・三春へいったともいうが、定かではない。

この十五里ヶ原の戦いから2年後、豊臣秀吉が全国を統一し、各地の争乱は一時的に収束する。

◆詳しい戦闘の様子

本庄勢は国境にあった小さな砦を次々に撃破し、大宝寺城と尾浦城の中間地点となる十五里ヶ原に布陣した。対する東禅寺勢は、東禅寺筑前守、弟の東禅寺右馬頭、最上義光から派遣された草刈虎之助ら、さらに最上に従う来次氏・砂越氏・池田氏ら18,000人が迎え撃った。

当時の戦乱の様子を記録した『羽源記』に、戦闘の様子が書かれている。

「最上義光によって派遣された草刈虎之助は、数千騎を従えて尾浦城にやってきた。女子供を山形に逃がし、東禅寺馬右頭と草刈虎之助は自然の要害・十五里ヶ原に陣取り、本庄繁長の兵2万人と対峙。夜、3,000人の本庄兵がひそかに川を渡って最上勢の背後にまわり、一気に攻められた最上勢は総崩れとなった。この戦いで草刈虎之助は討死した…」

この戦いで東禅寺筑前守と草刈虎之助は戦死。弟の右馬頭は単身敵陣に乗り込み、大将である本庄繁長の頭めがけて刀を振り下ろしたが、失敗し討ち取られた。こののち、本庄繁長は川北へ攻め込み、東禅寺城を落とした。最上義光は援軍を送ろうとしたが、羽黒山付近に着いた頃には戦闘は終結していたため、引き返したという。諸説あるが戦死者は2,000人近くとされ、現在も鶴岡市安丹には首塚が残されている。

現在、新潟県村上市に残される本庄繁長の兜には、小さな傷がついている。東禅寺右馬守が刀を振り下ろして付けた傷とされ、激戦を伝える資料として現在も大切に保存されている。

江戸時代前期の人気仮名草紙『可笑記（かしょうき）』を書いた如備子（によらいし）は、東禅寺右馬守の孫にあたり、文中には父から聞いた話として、東禅寺右馬守の十五里ヶ原での姿が書かれている。

「東禅寺右馬守はあかね紬の陣羽織を着て、さきがけにも、殿備えにもあたった。千安川合戦（十五里ヶ原の戦い）で本庄繁長と戦い、43歳で死ぬまでかすり傷をしたこともなかった。本庄繁長を本陣まで追い詰め、切りかかって星兜2寸ほどを削り、左耳まで達する深手を負わせたという…」

勝者・本庄親子の失脚

天正17年（1589）7月、十五里ヶ原の戦いに勝利した千勝丸は、豊臣秀吉に拝謁した。秀吉からは「出羽守」の称号と「豊臣」姓を与えられ、名を武藤（大宝寺）義勝と改めた。これには最上義光の反発もあったが、義勝は庄内の領主として正式に認められたのであった。

しかし、同年12月に武藤義勝は改易・信州への国替えを命じられ、庄内領は上杉景勝に任せられる。これには「太閤検地」が関係しているという。

天下人となった豊臣秀吉は、天正10年（1582）から全国で検地を実施。各地でまちまちだった検地方法や計量基準を統一し、隠し田畑も取り締まった。農民は耕作権を保障された反面、重い年貢がのしかかることになった。天正18年（1590）には大名たちの処遇・領土を改める「奥州仕置」を実施する。しかし、処遇に不満を持つ各地の土豪は反発し、一揆などの反乱が発生。秀吉は平定のため、奥州へ軍を送り込むのである。

庄内でも「藤島一揆」が発生。諸説あるが、武藤氏の失脚は“一揆を扇動した疑いがあったため”とされている。失脚ののち、本庄繁長と義勝は上杉景勝家臣に復帰する。その後、武藤義勝は名を改め「本庄充長」とし、「武藤氏」の家名は消えたのであった。

検地反対！農民たちの反乱

秀吉の検地によって、農民たちの負担は増大した。これに不満を持った人々は各地で一揆を起こしたのであった。天正18年（1590）9月ごろ、秋田・仙北地域で起きた「仙北一揆」の影響が庄内にも波及し、農民たちが決起する。朝日山城主池田氏ら土豪もこの一揆に参加した。当時あちこちの城館には上杉氏の家臣たちが置かれていたが、一揆勢はこれを次々に落とし、尾浦城を除く庄内中の城を占領した。当時仙北に居た上杉景勝は、この一揆を知ると庄内に戻り平定に動いた。三崎山（秋田・山形の海側県境）で待ち構えていた一揆勢の背後に回り込んで破り、最上川北側の一揆勢も次々に撃破した。なお、この際に金沢の大名・前田利家も景勝と共に行動している。



最上川南側に進んだ上杉景勝と前田利家は、孤立していた尾浦城へ到着。統率を失った一揆は鎮圧され、大将・平賀善可（田川の土豪）らは火あぶりにされた。また、藤島城に立てこもった金右馬允（武藤氏に仕えていた土豪）は直江兼統に説得され、城を明け渡した。その後もあちこちで反乱が起きたが、すべて鎮圧され、庄内の一揆は終息した。なお、進軍した上杉景勝と前田利家は、酒田の豪商・上林家に宿泊した。このとき、上林は夜襲を仕掛けた賊を撃退し、利家から褒美をもらい御用商人となり、家の通りは「御宿小路」と呼ばれるようになった。

この一揆ののち、庄内の城館はつぎつぎに消えてゆき、大宝寺・尾浦・東禅寺・藤島の城を残すのみとなった。城周辺で一揆が起きた責任を取り、観音寺城主来次氏秀は城を去り、上杉景勝の家臣となった。書に優れていた来次は右筆（秘書役）として活躍し、和歌の相手も務めた。

上杉 vs 最上 最後の衝突

慶長3年（1598）正月、豊臣秀吉は上杉景勝に会津への国替えを命じた。上杉氏は庄内14万石を含む120万石の大名となったのである。しかし、領地の間に挟まる内陸地は最上義光の領地であり、庄内と置賜の土地は分断されている状態だった。上杉氏にとっては、庄内一置賜をつなぐルートを確保することが悲願であった。同じ年、豊臣秀吉が死去し、五大老のひとり・徳川家康が政治の実権を握る。世の覇権を握りたい家康は、虎視眈々と豊臣派有力武将たちの討伐の機会を狙っていた。

慶長5年（1600）、上杉景勝は徳川家康に上洛をせかされていたが、これを拒否する。家康は怒り、最上義光に戦争に備えるように命じたとされる。同年、徳川家康と石田三成の対立から、「関ヶ原の戦い」が勃発。たった半日で決着がついたこの戦いとは別に、奥羽では「慶長出羽合戦」と呼ばれる上杉景勝 vs 最上義光の戦いが発生する。この戦いは庄内にも波及し、酒田も戦場となったのである。

志村伊豆守の長谷堂城防衛

最上家家臣、志村伊豆守光安（～慶長14年（1609））は、慶長出羽合戦当時、最終防衛線となった長谷堂城の城主として、領内に攻め込んでくる直江兼統ら上杉軍を迎え撃った。長谷堂城は標高80mの丘陵に築かれた、守備にすぐれた山城である。

直江兼統は、1万8,000の大軍で攻め込んできたが、志村は上杉勢を誘い込み一斉射撃を加えるなど、さまざまな策で兵を退けるのであった。長谷堂の防衛に当たる最上軍の戦力は、わずか1,300ほどである。志村らの奮戦により長谷堂城は2週間持ちこたえ、そこに「東軍勝利」の一報が入り、上杉軍は撤退を余儀なくされる。志村はこの長谷堂城での活躍により、名将として評価される。



現在の長谷堂城跡（山形市）

軍記に書かれた「庄内攻め」

『奥羽永慶軍記』『羽源記』などの軍記に、最上軍による東禅寺城攻めの様子が書かれている。本によって一部相違もあるが、おおまかな流れについて解説する。

長谷堂城を落とせなかった上杉軍は、西軍敗戦の一報を受けて撤退に転じる。最上軍はこれを追いつき、各地で激しい撤退戦が繰り広げられることとなる。内陸の谷地城にいた下吉忠（尾浦城主／上杉軍）は撤退が遅れ、最上軍に取り囲まれ、降伏した。そののち、下吉忠は最上軍の先手となり、酒田攻めに関わることとなる。

秋、下を含む最上軍は庄内に攻め入り、尾浦城を攻めて奪った。元城主であった下は“最上軍”として尾浦城に戻ることができたということになる。東禅寺城を守るのは、上杉軍の河村兵蔵と志田修理亮義秀である。下は交渉役となり、「東禅寺城を明け渡し、会津へ引き上げろ」と河村・志田に伝えたが、二人が応じることは無かった。

春になり、最上義康（義光の長男）を大将とした、1万5千を超える軍が酒田へ攻め込んでくる。この軍には由利地方の諸将も参加していた。大規模な戦闘だが、家康からの処分を待つ上杉景勝には援軍を送ることができず、東禅寺城は孤立無援の防戦一方であった。東禅寺城は大手門・搦手門・浜手から攻められ、攻防戦ののち（日数は諸説あり）下吉忠の交渉を受け入れて降伏開城となった。

河村・志田らは、朝日山の山道を通り米沢へ逃れたと伝えられている。

最上義光の勝利

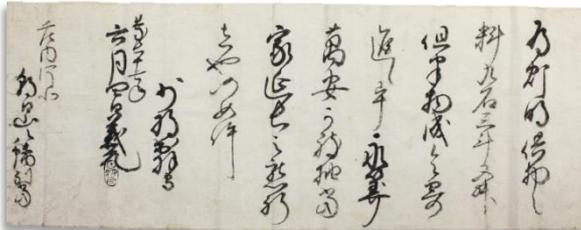
慶長出羽合戦が終わり、上杉景勝は会津120万石から米沢30万石に減石された。最上義光は庄内、由利を与えられ、計57万石へと躍進したのであった。

慶長6年（1601）、東禅寺城には長谷堂城の戦いで活躍した志村伊豆守光安が置かれ、川北3万石の城主となった。最上家の家臣たちも城下に移り住んだが、この際に自らの出身地を町名（最上町・長泥（瀨）町・戸沢町）とした。慶長8年（1603）、浜に大亀が出たことを吉兆として、東禅寺城は「亀ヶ崎城」へ、大宝寺城は「鶴ヶ岡城」へ改号された。

合戦によって大半が焼け野原となった酒田町では、志村伊豆守と町年寄らが協力し、再度町づくりが行われた。現在に続く酒田中心地の町割りも、この時代に完成されたという。強風が吹く酒田は、防災を意識して北西と南東の風に対して直角・平行に道路が造られたが、それでも大火は頻繁に発生した。

酒田市指定有形文化財 最上義光寄進状

（慶長17年（1612）矢流川八幡神社寄託）



最上義光は検地を行なった際、武運長久を願い、寺社仏閣に寄進をした。義光知行と言ひ、同じ年月日の寄進状が各地に残されている。当時の川北検地奉行は、亀ヶ崎城主志村伊豆守家老、進藤但馬である。

最上家のお家騒動と改易

慶長16年(1611)8月、志村伊豆守光安が没する。その跡目は息子・光惟が16歳で継ぎ、老臣・進藤但馬がサポートした。しかし、慶長19年(1614)正月、最上義光が没すると、最上家は後継者争いによって混乱してゆく。義光の長男・義康は殺害され(諸説あり)、三男・義親(清水義親)は豊臣家に内通した疑いで自刃している。徳川家に仕えていた次男・家親が最上家を継いだ、元和3年(1617)に没した。そのため、家親の息子・義俊が12歳で当主となったが、徳川幕府によって最上家は元和8年(1622)に改易。最上家とその家臣たちは散り散りとなった。

このお家騒動のさなか、慶長19年(1614)6月1日、庄内では志村光惟暗殺という大きな事件が起きる。志村光惟と進藤但馬ほか家臣たちは、鶴ヶ岡城代・新関因幡守に招かれ、朝粥をごちそうになった。その帰り、鶴ヶ岡城二の丸西門で新関因幡守の家臣・一栗兵部が、数十人の部下を連れて志村たちに襲い掛かり、殺害したのである。一緒に招かれていた大山城主・下次右衛門も殺されている。

新関は、事件を起こした一栗を討ちとり一族を皆殺しにした。なぜ一栗がこのような事件を起こしたのかは現在も不明だが、最上家のお家騒動が絡んでいるとも言われている。

朝日山城主・池田氏の寄進物・愛用品

池田讃岐守盛周は、朝日山城(現在の酒田市生石地区楯山)に住んだ土豪である。先祖が南北朝期に城を築き、室町期に武藤氏の配下となった。江戸末期ごろまでは堀や庭園の痕跡が残っていたそうだが、今は藪に覆われ確認はできない。周辺に多くの領地をもち、そこで暮らす農民たちは池田氏のもとで家臣団を形成し、「朝日山五十人衆」と呼ばれた。

武藤氏の滅亡後、太閤検地に反発する一揆に参加。敗北し、城を捨てて真室川城・鮭延氏のもとへ逃れる。この一揆で城裏手の修験の地・鷹尾山も廃止となった。

慶長出羽合戦が起こった慶長5年、反上杉派として庄内に戻り、小規模な反乱を起こしたが、これは上杉軍に一掃されてしまう。池田盛周は再度隠れ、慶長6年に最上義光が庄内を掌握すると、古川村を与えられ、志村伊豆守配下となった。近世初期には帰農し、肝煎となったのである。



酒田市指定有形文化財 革包日の丸 丸胴具足

(桃山期 矢流川八幡神社寄託)

朝日山城主・池田讃岐守盛周の所用と伝えられる具足。兜についた五輪型前立は、死を覚悟して戦に挑む武将に好まれたモチーフである。刀と同じく、池田氏の子孫によって矢流川八幡神社に奉納された。



刀（上段）・太刀（下段）

池田氏の子孫により、矢流川八幡神社に奉納された。刀は室町時代のもと考えられ、太刀は江戸時代のものであるという。

刀…無銘

太刀…（表）武蔵守藤原兼中（裏）越前住

（注）本来、太刀の飾り方は刃が下になるが、今回のように打刀と共に飾る際は、打刀の向きに合わせる。

また、下段の太刀は銘の向きを考えると「刀」だが、太刀拵えであるため「太刀」としている。

庄内藩の時代へ

元和8年（1622）の最上家の改易により、庄内には酒井忠勝が石高を加増され、信州松代（現在の長野市）より転封されることとなった。酒井家は徳川四天王・酒井忠次の子孫にあたる名門である。

酒井家は石高が増加したため、家臣を増やす必要があった。そこで、浪人となった最上家旧臣らに声を掛け、足軽として召し抱えた。しかし、最上家時代の石高に関係なく、すべて足軽としての雇用であったので、決して良い条件ではなかった。旧臣たちのなかには、二君（最上家・酒井家）に仕えることを拒み帰農する者もいた。彼らは代々続いた武士の身分を捨てることを恥じ、最上川の河原で家伝来の系図や書類、武具などを焼き捨てたという。

酒井忠勝の入部によって改めて検地が行われ、農民たちの年貢は収穫高の“4割”（最上家時代）から“5割5分+雑税”へと跳ね上がった。あまりの重税に他国へ逃亡する農民も多く、藩はこの件の隠ぺいを図ったという。この高い年貢負担は、石高の増加を図る藩の都合でしばらくの間続けられた。

亀ヶ崎城の引き継ぎ

最上家の改易ののち、元和8年（1622）9月より、鶴ヶ岡城・亀ヶ崎城の引き継ぎ作業が行われた。展示している覚書2通は、当時の古文書からの写しと思われる。これら書状や記録書から、江戸時代初期の亀ヶ崎城の規模がわかっている。

本丸には17の部屋があり、すべて合わせて404畳であった。そのうち大広間は78畳で、風呂と脱衣所、別棟には台所もある。そのほか、建物が6棟、土蔵が4棟あった。

寛永13年（1636）には兵具改めも実施され、本丸内の具足や武器類の数と状態の確認作業がされた。ただし、「虫食いがあり使えない」「道具が揃っていない」「銃の金具がない」と書かれている武具も多く、争乱の時代が過ぎ、兵具が死蔵されていたことをうかがわせる。

庄内武士たちのその後…

中世期の庄内で争いを繰り返した城主たちは、江戸時代になってから、どのような運命をたどったのだろうか。改めてその後の川北有力者を見てみよう。

来次氏（観音寺城）…城を離れ、上杉家家臣となる。子孫も上杉家に代々仕える。

池田氏（朝日山城）…上杉氏に対して反乱を起こしたのち、帰農。肝煎となる。

留守氏（新田目城）…武藤氏・最上氏・上杉氏…と、その時代ごとの実力者に仕え、慶長年間に帰農。一族の一人は上杉家家臣となり、馬廻り400石を与えられる。

砂越氏（砂越城）…武藤氏との対立ののち、十五里ヶ原の戦いの余波を受け城は陥落。秋田へ逃れたと記録があるが、文禄元年（1592）以降の情報は不明。

庄内では、戦乱のあと上杉家家臣として召し抱えられ、米沢に移り住む城主が多かった。地元に残った例は少なく、池田氏・留守氏くらいである。

地名と給料

◆中世由来の地名

入部の際、藩主は鶴ヶ岡城に居住し、亀ヶ崎城には城代を置くことに決めた。亀ヶ崎城には新井田川西岸に「三の丸」区域があったが、城の規模縮小のため濠を埋めて土手は崩され、三の丸は酒田町に編入された。土手を貫通させたことから、「突き抜き」という古い地名が伝えられている。

武藤氏の時代に関わる町名「米屋町」と「元米屋町」の由来も面白い。武藤氏の時代に年貢米を置いていた「米屋町」だが、天正18年（1590）頃に荒瀬・遊佐郷の米を置く「新」米屋町がすぐ近くに誕生。昔からあった「米屋町」は「元」米屋町と呼ばれるようになり、「新米屋町」は“新”が取れて「米屋町」となった。町名の逆

転が起きた事例である。

武藤氏時代		上杉氏時代		江戸期～現在
米屋町	→	米屋町	→	元米屋町
(存在せず)		新米屋町	→	米屋町

◆武士の給料

江戸時代、藩に仕える武士たちに払う給料は「米」であった。酒田と鶴岡には米蔵が建てられ、年貢米が保管された。庄内藩は「米札」を給料支払いに利用し、食べる分の米を蔵で交換できるようにし、残りの米札は米商人に売り払えるようにした。その米札の売上げを収入にして、侍たちは暮らしていたのである。

右写真：米札（宝暦13年（1763））

しかし、貧しい下級武士の場合は給料だけでは暮らせず、藩の公認のもと内職や塾の運営を行い、副収入を得ていた。藩士たちの給料（石高）は、城代であれば1,500石ほど、町奉行では200石～300石ほど、下級武士である足軽では5石～8石ほどであった。（1石はおおよそ6万円程度）



武士の仕事

初代亀ヶ崎城代となったのは、藩主・酒井忠勝の叔父、松平甚三郎である。そのほかに町奉行1人、物頭2人、平士20人、足軽50人が在籍した。この足軽勢のなかには旧最上家家臣たちが含まれている。

※物頭…武士らをまとめる長、平士…普通身分の武士、足軽…下級の武士

亀ヶ崎城に住む武士たちの仕事は、現在の警察と市役所が合わさったようなものであった。その中の「御徒目付（在番）」の主な仕事を見てみよう。

- ①城や倉庫、酒田町の見回り
- ②出入りする船の検分
- ③火災の吟味
- ④犯罪者の取り締まり・処分
- ⑤お触れ・お達しなどの通達 など

幕府に納める御城米の輸送は、庄内藩の武士たちにとって重要な仕事であった。出船の際は、町奉行・御徒目付・足軽目付らは羽織袴姿となり、町奉行屋敷から船に乗り輸送船を見送る。また、火災が発生した際は奉行らがトップとなり、酒田町の大工・木挽職人たちと共に、家を壊す「破壊消火」を行った。もちろん、火災後の保障や復興にも奉行は関わっている。

こうした仕事のほか、酒田町で行われる神事への参加・興行の見回りなどの行事管理も行った。御徒目付は40日交代で、庄屋などに宿をとって町政に関わった。御徒目付たちの指示で、足軽目付（監察係）は動いており、その膨大な記録は「亀ヶ崎足軽目付御用帳（酒田市指定有形文化財）」として残されている。武士たちと酒田町人たちとの関係は比較的良好で、町政に関して衝突するようなことはなかった。

武士の時代のおわり

徳川幕府成立から約260年が経った明治元年（1868）、戊辰戦争が開戦し、戦国期以来となる「内戦」が全国各地で発生した。庄内藩は幕府側として戦い、藩士だけではなく町人・農民たちも動員して奮戦したが、新政府軍に敗北した。

明治2年（1869）に「武士」の身分は消滅し、「華族」「士族」「平民」が新たな身分制度として誕生した。しかし、士族と平民はほぼ同じ扱いであるほか、廃刀令・秩禄処分も行われ、特権を失った下級武士たちは次々に没落してしまった。

こうした新政府のやりかたに不満をもつ士族たちが、西郷隆盛と共に起こした事件が、明治10年（1877）の「西南戦争」である。この戦争は西郷側の敗北に終わり、士族たちは新政府に抑え込まれる形となった。その後、「華族」「士族」「平民」の制度は、昭和22年（1947）に戸籍法の改正で完全に消滅した。

慶長出羽合戦から420年近くが経過し、いまだ謎が多い中世酒田だが、現在に伝わる書状や武具などからは、当時を生きた人々の心情や行動を感じ取ることができる。当企画展で展示している資料をもとに、当時の武将・武士たちがどのような考えで交流し、裏切り、どのような作戦で戦闘を行ったのか、自由に想像していただきたい。

西暦	元号	主なできごと
— 庄内に拠点を置く武士たちの争い —		
1466	文正元年	遊佐氏が東禅寺氏と争い、勝利。川北一帯を支配する。
1512	永正9年	砂越氏と武藤氏が東禅寺城で争い、砂越氏が勝利。
1513	永正10年	砂越氏が田川に攻め込むが、返り討ちにされる。砂越氏は一時断絶となるが、5年後には勢力を盛り返す。
1532	天文元年	砂越氏、土佐林氏（武藤氏家臣）を追討する大乱を起こす。大宝寺城下が焼かれ、新たに尾浦城（大山）が築かれる。
1538	天文7年	砂越氏が東禅寺（当時武藤氏が所有）を攻める。東禅寺は破られるが、武藤氏の一門が城を引き継ぐ。
1578	天正6年	上杉謙信が急死。後継者争いが起き、結果、養子である景勝が家督を継いだ。観音寺城主、来次氏が武藤氏に逆らうが、降参する。
— 上杉氏と最上氏の庄内進出 —		
1583	天正11年	武藤氏家老、前森蔵人が最上義光と内通し離反。尾浦城を急襲し、武藤義氏を自害に追い込む。
1584	天正12年	武藤義氏の弟、義興が家督を継ぎ、上杉家に忠誠を誓う。
1587	天正15年	武藤氏と最上氏が和睦の方向へ進むが、すぐに争乱が発生。義興は山形に拉致され、数年後に自害。義興の養子・義勝（本庄繁長の実子）は、越後へ逃げ延びる。
1588	天正16年	早春から本庄繁長が動きだし、8月に「十五里ヶ原の戦い」が勃発。激戦となり、本庄氏が東禅寺氏（前森蔵人）を討ち取る。庄内は本庄氏の領地となり、のち、上杉氏の領地となった。
— 上杉氏による庄内統治時代 —		
1590	天正18年	小田原の役に際し、船の調達、監視に酒田の豪商が協力。7月、豊臣秀吉が全国統一。検地が庄内でも本格化。検地に反対する一揆が発生。各地の城が攻撃を受ける。来次氏は観音寺城を離れ、上杉氏の配下となる。
1591	天正19年	庄内の城は次々に棄却され、土佐林氏・来次氏・留守氏など、土豪たちは上杉家臣団に編入される。
1592	文禄元年	3月、征韓の役が始まり、豊臣秀吉が朝鮮に出兵。来次氏・留守氏らも九州へ出陣する。物資を輸送するための船が、秀吉の命により酒田より徴発される。
1598	慶長3年	豊臣秀吉が没し、徳川家康が台頭。豊臣側と対立する。上杉景勝は越後から会津120万石へ転封となる。
1600	慶長5年	9月、「関ヶ原の戦い」が勃発。同じくして上杉対最上の「慶長出羽合戦」も始まる。
1601	慶長6年	3月、最上家家臣・志村伊豆守による酒田攻略が始まる。4月、東禅寺城が開城。最上氏が庄内を制圧。
— 最上氏による庄内統治時代 —		
1602	慶長7年	最上義光、庄内・由利を含む57万石の大名となる。
1603	慶長8年	徳川家康が征夷大將軍となり、江戸幕府が開かれる。東禅寺城を「亀ヶ崎城」に改号。
1609	慶長14年	「山王祭（酒田まつり）」が始まる。志村伊豆守が死去。（慶長16年の説あり）
1614	慶長19年	最上義光が死去。後継者争いにより家中混乱。亀ヶ崎城主・志村光惟と家老・進藤但馬が暗殺される。
1622	元和8年	最上家が改易となり、57万石は没収される。庄内に酒井忠勝が入部。亀ヶ崎城は支城となる。